

「一流になりなさい。それには、一流だと思い込むことだ」という本からです  
短所なんか見えなくなる。

心に残り、戒めている出来事があります。頑張り者で、人望もあった一人のリーダーが、許されざる不正をしていたことが発覚したのです。

私自身にとってはじめてのことで、処分について一週間眠らずに悩みました。最高幹部の結論は、厳しいものでしたが、いたし方ありませんでした。

後始末を終え、退職することになったその部下を連れて、船井先生の部屋の扉の前に立ちました。よく勤めてくれた彼は、うなだれて青ざめていました。「やあ、入りなさい。ご苦労様」入口に立って深々と頭を下げる私たちに、笑顔で声をかけると、さあ、と言って応接の椅子へ招きます。

おずおずと、詫びの言葉を口にする彼を、船井先生は笑顔でじっと見ていました。「いくつになったかな？ そうか。まだ若いな。いっぱい時間がある。何でも、取り返せるな」若いうちはね、いろんな失敗をするよ。でも、そこから学べばいいさ。これからの人生に役立てなさい」

彼のすすり泣きの声が、会長室にしばらく間をつくっていました。さあいこうか……。席を立つと、船井先生はこう言って、扉のところまで近づいてきてくれました。

「よく頑張ってくれたけどな。ご苦労様だったね。よい人生にするんだぞ」彼を見送り、処理の報告と、お詫びの言葉を伝えたくて、再度一人で会長室を訪ねました。「申し訳ありませんでした。そして、ありがとうございます。彼にとって本当に救われる言葉をかけていただきました」頭を下げながら、本当に思ったことを伝えたのです。

「ご苦労様。いろいろ大変だったね。いろんなことがあるよなあ、佐藤君も」そう言って、「ハハハ」と先生は少し笑いしました。「彼は子供さん、一人だったかな？ いくつだい？」「確か、四つです。」そう答えると、「四つか……。可愛い盛りだな」と、ひとり言のように言って天井を見上げています。「必ずしっかりと、素晴らしい人生を生きてくれると思います。いろいろとありましたが……」「うん。そうだな。そう思う」「佐藤君な」。そう言ってソファから立ち上がり、机のほうへとゆっくり歩きながら、船井先生は言いました。

「欠点なんか、見えなくなるよ。彼は、きつとうまく生きてくれる」なぜかわかりませんが、涙がこみ上げてきました。欠点なんか、見えなくなる。

この瞬間も船井先生は、心のなかで彼の長所をカウントしてくれているのだろうと思いました。そんなリーダーに、自分は何れるのだろうか、そう思いながら、先生の微笑む顔を見つめていたのです。「長所だけを見ようとするとね、いつか欠点や短所なんか見えなくなるんだよ。気にならないんじゃないかと、見えなくなる」数週間後、先生にその言葉の意味を尋ねました。「親は、子供の短所が見えないだろう。それより、短所にはなかなか気づかない。自己愛や、親の愛があるからな」親身になる、ということかと気づきました。

心から親身で接していれば、短所には気づかなくなるかもしれない。「そうかもしれないな」そうかそうかと、船井先生の言葉を聞いていました。彼はいま、頑張っってよい人生を過ごしているでしょうか。あのときの船井先生の言葉を糧としたに違いないと信じてます。

数週間後、先生にその言葉の意味を尋ねた、筆者に船井先生は何と答えましたか？

( )